

# 入園前の子どもの一日



Tは今年の四月から幼稚園の二年保育の年少組に入園する子どもです。前号にTの幼稚園選択のことについて載せましたので、今度はTが入園する前の一日の生活を画いてみたいと思います。

ある日、T君のお宅に、二人の記録者が出かけました。そして三十分交替で記録したものを読み易くしたのがこの記録です。それとともに、Tの母親に、入園前のTの生活の特徴や、しつけ方について記していただきました。これも一しよにここに掲載しました。幼稚園に入園前の幼児の生活の中にあられる問題が、数多く提供されています。Tはのびのびとした元気のいい子で、Tの母は子どもに理解のある、しっかりした母親です。子どもによって生活は異なるでしょうが、また共通の問題も多くあるでしょう。

これから、Tが幼稚園の生活に入ってゆく過程をひきつづいてみてゆきたいと思います。きっと多くの考えさせられる問題が提出されるでしょう。

朝

記録者達が訪れた時Tは母と妹といっしょに朝食をしていた。

十時

T「こんにちは」とニコニコしながら母といっしょに玄関に出て来た。そしてすぐテーブルにもどって、スプーンを口に運んではいたが、記録者に気をとられて、何も食べていない。やがて隣の部屋から字あわせのカードを持って来て遊びはじめた。今日二度めの遊びである。Tは朝食の前に外で一あそびしていたのだった。

T「おかあさん、おかあさん、ぼくね、わわってやりたいけど、わわはどこにあるの？」

母「さあ、どこにあるかな。さがしてごらんなさい。」

T「わわ あるの。」

母「必ずあるわよ。」

T「あ あった、あった。」

母「つねおさん 並べるんだったら、左からっていったでしょう？」

「ここから並べてごらんなさい。」

T「こっち？」と母の方を見ながら、「つけるの？ はなすの？」という。

母「どっちでもいいわ。」

T「これ電車か？ バスか？」

母「そうね、どっちにも似てるわね。」と妹に食事させながら、いつもなら、Tの友達があそびに来るころなにと

母「たっちゃんは？ けんかしちゃったの？」とTにきく。

T「ちょっとはずかしいんだ。」と母によりそって、耳うちをする。

前日、やっぱり友達のだれかとききかいをしたらしい。Tはまた

カード遊びをはじめた。

T「おかあさん、これもとっちゃおうか?」といって、まだきり離

されていないカードをとり上げる。

母「ええ、いいわよ。あなたのだから、御自由に。」

Tは、あれこれカードをきりはなしていた。その中の一枚、

おし」というカードを手にとり

T「おかあさん、ぼ・おし、みてたらぼおしのおいが、足にき

ちゃった。」と母の方をみる。そのうちTは記録者のストップウ

ォッチに興味を示しはじめた。

T「それなにをするの? はかるんでしょう? ぼく二十貫キロだ

よ。」

母「二十キログラムよ。」

T「二十キログラム、おもたいよ。」

母「でもこれは、重さをはかるのではないのよ。見る時はちゃんと

お座りしてね。」

T「——。」

母「きたなくしないようにね。」

T「きたなくなったらふけばいいじゃない?」とTはストップウ

ォッチをじっと見ている。

T「時計はき、十二で一にかわるね。」

母「よく知ってるわね。」

T「だんだん、さしてくんだね。」

母「さあ、もうわかったでしょ、きたなくするとい

けないし……」

T「そういうふうになってるのか、なんだ。」

母「ありがと、して、おかえしして。」

T「どうもありがどう。」と記録者に返しなが

T「カチカチッいているけど何なの?」と尋ねる。

十時三十分

お兄さん

Tがストップウォッチをながめている間

妹「おんり、おんり。」といって、椅子にあがろうと

している。母はそれをみながら

母「なんでもおんり、おんりって……。」というどT

も妹の様子をみて

T「登るのにおんり、おんりっていうのね。」とわら

う。

◆◆◆◆

おやつのおせんべいを皆で食べているとき、妹

は両手におせんべいを持って食べていたが、Tは

これを見て、妹の傍に行き、

T「ちゃんとおいておけよ。」と妹の手からおせんべ

いをとりあげ、菓子器にもどす。妹はすぐ、菓子

器よりまたとる。妹は泣きそうになり、いっしょ

うけんめいである。

母「どうしたの?」

13:30	13時	12:30	12時	11:30	11時	10:30	10時	9:30	9時	8:30	8時	
食	手洗い 記録者の の会話	戸外での遊び	三輪車 畑の中の遊び ブランコ(妹といっしょ)	カード遊び その他	テレビ ビデオ	カード遊び、母との会話 ストップウォッチいじり	記録者到着	食	食事	戸外での 遊び	起床 身じたく	睡眠

T「だって二つもとるから、欲ばりだもの。」

しばらく食べていて、おせんべいものこり少なくなつて

母「もうきげましようね。」

T「イヤー イヤー。」

母「じゃ欲ばりさん。最後の一つを召し上がれ。」

Tは最後の一つを口にして、机にもたれながら、ウーン ウーン

とひとりごとをいながら、椅子をゆすつている。いつもならも

う外に遊びに行っているのだが、今日は、友達に遊びに来ない

し、Tは、いささか、もてあましぎみになってきた。

外で、自転車の音がすることに、子どもが走ってくるような音が

きこえることに、Tは、とび出していったが、友達ではなかった

ので残念そうにもどつて来た。

いたずら

隣の部屋で、スウィッチケースのバンドをふりまわしている。

T「おいしいもの食べたくなつちやつた。食べちゃうね。」

母「——。」

ふすまをあけて押し入れに入り上の方にしようとする。押し入れ

の上の方には、父の絵の道具がおいてあり、下には子どものおも

ちゃがおいてある。絵の具がおちそうよ。そこにのつて、よかつた

かしら？」

Tはおし入れより顔を出し、

T「やさしくいって。」と母をみる。

母「そこにのつてよかつたかしら？」と声をやわらかにしている。

Tは、ニヤニヤして出て来てふすまをしめ置の上  
に腹ばいになる。

◆◆◆

Tは古くなつた腕時計をいじりながら、丸椅子を

足で倒す。

母「あぶないわ。」

Tは時計のガラスを見ながら

T「これ、われたつていい？」

母「あぶないからだめ。」

T「片づけても？ クリーナーでやっても？」

母「クリーナーでやっても目に見えないのがあるか  
もしれないわ。」

Tは歌をうたいながら時計のねじをぬきながら、

T「これ古くなつちやつたのかな。」という。

母「あら、つねおさん、およしなさい。」

T「ブルー——。」といながらねじをもどす。

外で自転車の音がする。

母「たっちゃんかな。」

T「外さむいからいや、さむいんだい。」

母「じゃ、ジャンパーきたら。」

T「——。」

母のしつけ（おしっこ）

外で三輪車の走る音がする。

母「あつ、たっちゃんよ。」

19時	18時	17:30	17時	16:30	16時	15:30	15時	14:30	14時
夕食	テレビの会話 記者との会話	テレビの会話 記者との会話	家の中 で遊び 反人 常態 遊び	外で友だちと 遊ぶ	家の中で 母との遊び	戸外での ひとり遊び (待合室)	友だち来訪 おやつ	トランソ び	フ び
記録者 辞去									

Tは急いで玄関からのぞいてみる。

T「あついな。」

しかし、おっかけていけば、友達がみつかりそうだ。靴もはいた。その時、おしっこに行きたくなった。

T「お母さん とくべつでおしっこしたい。」

母「とくべつはだめよ。お母さん、ここでもしろくしといてあげるからいつてらっしゃい。」と机の上のカードをみせて、Tに便所に行かせる。その間に母はカードを並べる。Tが出て来て、

T「どら？」とカードをのぞき込む。

T「こつちから読むの？」と左を指さす。

T「お・り・こ・う……。だれが？」と母の顔をみる。得意そうである。

T「ウ とくべつでなくしたから？」

母「そう。」

テレビ——十一時

T「今日はブルーフリーじゃないの？」

母「今日は水曜日よ。」

T「それじゃ3（チャンネル）にしよう。ピノキオなの。」とテレビをつける。画面は高学年向け図工科の学校放送で、紙で作った衣装の学習。終りに近く、仮装行列のよ

### 母の記録 ①

○妹について

T雄は「とみこ」とよぶ。

T雄と三歳五か月はなれている。

生まれたては「赤ちゃんよかったな。」

「可愛いね」とよろこんでいたが、この頃はそうもいかなかった。

夕食の後など二人でよく遊ぶ。

「おにごっこ」と「イナイナイバア」を一しょにしたような遊び、電車ごっこ、オモチャ箱に二人で入るといった遊びが主である。

キャッキョッ遊んでいると思うと、すれちがう瞬間に抱いて倒して背中を平手で叩く。

何で覚えるのかとにかく練習もしないでよくスムーズに行くものだと感じ、あきれてしまうが妹はヒーとなく。

「可哀相だからとみこちゃんおねんねさせましよいか」というと、「イヤーン遊ぶ」「とみこいじめたいんだ」ともいう。

昼間お天気がよければ、二人を庭に出すことにしている。いじめることもなく狭い庭の中を二人で歩き、妹がころぶとひざと手をはたいてやっている。

ある日

T雄「庭より外へ出したいな。」

母「どこかへ行ってしまうからここだけにしませう。」

T雄「とみこ、どこかへ行っちゃっていい

よ、そしたらかたづけなくていいですよ。」

(妹の出したオモチャを「赤ちゃんだから、お母さんと一しょに片付けてあげましようよ」といつもいうのを指しているらしい。

母「とみこちゃん、可愛いなの。」

T雄「ウン、朝おきた時は、可愛いけど、あとちょっと可愛い。」

母「ほら、ああやって歩いているのをみていて可愛い？」

T雄「ウン、可愛い、やっぱり可愛い」

まだ、ベットに入って寝ていた赤ちゃんの頃は可愛いと思ったのだらうが、いまや、食事も同じ、おやつも同じ、遊びも同じ友達として遊ぶのであろう、その上、トランプをしていればとりに来る、積木をやれば、こわしに来る、絵をかこうとすると、クレヨンをとりに来る(妹にも場所をきめて同じようにクレヨンと画用紙を与えてもやがて自分の場所があきて、お兄さんの椅子へ登ろうとする。)

そういうふうなのに可愛いと思えという方がムリなのかも知れない。今のうちは同じ仲間としての思いやりくらいにして、もう少し上手にT雄の妹に対する気持を、時々、とらえてやりたいと思う。

T雄の行為が「いじめる」ということばに集約されてしまうが、非常に残酷でないかぎり、それがごく自然の行為の場合であるかも知れない。

うに進行している。Tはみながら

T「変な王子様だね。」とバンドを手持って器械体操のような動作をする。画面にはいろいろな紙の衣装をつけた小学生が登場する。

T「やー すごい の きゃあ、あれ。」

ビノキオが始まる。

テレビに合わせて首をふり手をふって歌う。

T「あんね。つまっちゃうの。ビノキオがわるい猫をつかまえたの。」と記録者に話す。画面に紙で作った波がうつっている。

T「あれ、紙でやっているんだよ。だって波ってああじゃないもの。」

椅子から落ちそうになり、机によりかかって、バンドをしゃぶり出す。画面にビノキオが出て来る。

T「あれがビノキオだよ。」と記録者にいう。

立ち上り、机の上に腹はいになってみる。足で椅子をさぐる。

水くみの場面になり音楽がなり出すと、ボンボンと足を壁にやる。ビノキオの番組がまた来週と終る。

T「また来週か。」とテレビの歌に合わせて歌う。

友達の家に行く——十二時

近所のNの母が来る。母はNの母と話している。Tは一人で、時計をいじったり、机に上ろうとしたりしているが、母にうながされて、Aの家にあそびに行く。

T「たっちゃん、たっちゃん、たっちゃん。」  
と呼ぶが、返事がない。るすらしい。

門にぶら下り、もう一度呼んでみる。

T「たっちゃん。」

T「じゃ、ここであそんでいようか。」とつぶやいて、道路においてあった三輪車にかけよって、走り出す。しばらく、三輪車であそんでいたところ、背後よりAがやって来て、

A「つねおちゃんっ。」

T「はい。」

A「ぼく、遊ばないよ。」

T「いいよ。」

A「でも遊びたいんだ。」

T「じゃおいでよ。」

A「僕んちへ来れば?。」

T「ぼくんちがいいよ。」

と二人は、電柱のそばをとおりかかる。

Aは電柱に耳をつけ、

A「ねえ、何か鳴っているよ。」

T「知ってらい。」と云い、軽くAをぶつ。

A「じゃ、もう遊ばないよ。」

T「いいよ。」

Aはそのまま家に入り、Tは添木の鉄線にぶら下がり、  
T「たすけてくれよ。たすけてくれよ。」とひとりごとをいってあそんでいる。

しばらくの間、Tは石垣の上のぼったり、添木に足をかけた  
りしていたところ、

母親とNの母が話しながら、やって来る。

Tは母のところへとんで行き、母のそばで走りまわって遊ぶ。母から離れたたり、そばに近よったりをくり返していたが、母をみながらへいの方に走って行き、へいをボンボンと蹴る。

母「つねおさーん。」といいながら Tのところに来て

母「おてつだいしてちょうだい。玄関あけたままでしょう？ かぎをしめてきてちょうだい。」とひそひそ声でいう。

T「はーい。」と走り出し、後をふり返ってT「そこにおいてよー。」と走って行く。

途中、道路においてあった三輪車にのって走る。そこにAがとおりかかる。

A「のっちゃんいけなよ。」

T「きのうはあそんでやるけど、今日はだめ。」と三輪車からおりて、家かけこむ。鍵をしめ、うらから出て来る。走って母のいる方へ行くが、母の姿がみえない。

T「どこにいったんだらう。おかあさーん。」母はNの家から出て来て、

母「はーい。おりこうさんね。よく出来たわね。つねおちゃんもおばちゃんのところへ

## 母の記録② Tの交友関係

父親が十時出勤なので、八時三十分ごろT雄も一しょに起きる。

洋服をきて、はみがきを終えるか終えないうちにAちゃんが「T雄ちゃん」と来る。

午前中

Aちゃん(三才〇か月)

食事前一時間ほど遊び、食事後午前中一ぱいはAちゃんと遊ぶ。主な遊びは三輪車を二つ並べて競走のような形でAちゃんの家からT雄の家までを往復する。

疲れるとAちゃんの家でオモチャで遊ぶ。家でテレビをみる事もある。

(十時五分から①「お母さんと一しょ。」十一時から③「幼児向」その間に⑩「うたうえほん」や「元氣いっぱい」等)

Aちゃんと遊ばない時は庭で妹と遊ぶ。

午後

一時間くらいAちゃんと遊んでいる。

N子ちゃん(六才〇か月)

幼稚園の帰りにT雄のところによつて「注服をきかえているから家にいらっしやいね。」といつて行く時もある。

N子ちゃんの家は六百坪の畠あり、木立をまいたところ、芽の出ているところは入ってはいけませんが、木にのぼつてもいいし、

大きな穴はふきいであつて危なくないようにしてある。

N子ちゃんの家は、男の子が多く集まつた時は(小学一年二名、三年一名、T雄、A、N子)オニゴッコ、家の廻りを一周して来る、畠の竹の棒をぬいてチャンバラをする。

女の子が多く集まつた時は(小学一年一名、幼稚園二名、T雄)家の中で絵をかいたり、オモチャで遊ぶ。外で遊ぶ時は、花を一ぱい頭にまきちらしたり、葉っぱを背中にさしたり女の子は天使がおすき。竹の棒を十字にくんでお祈りしたりする。

M子ちゃん(五才五か月)

有名なカソリックの学校の附属幼稚園に通っている。水曜の午後ピアノ、土曜日に絵の先生のところに行く以外は家の中で弟と遊んでいる。毎日絵を書いたり、ピアノをひいたりして遊ぶ、一週に一度くらいお友達をお招きして(H子ちゃんだけ)家の中で遊ぶ。

T雄と遊ぶのはたまにこちらが窓にいて、あちらが庭におりているとき、「遊ぼうか」という相談をして、それぞれの母親に許しを得て遊ぶ。その他、夏休みとか冬休みとか長いお休みの真ん中の数日である。というのは、T雄と遊ぶとどうしても遊びが活発になる。ブランコも普通にのつ

来る？」Tはのこっている旨をつける。

Tはひとりで、石なげをしてあそぶ。

T「ピッチャー投げました。」

しばらくして、石なげをやめ、Aの隣の家  
の石段をかけたぼつては、とびおりる。

庭で、Aの兄達（小学生。流感のため休  
校）があそんでいる。

T「仲間にしてくれないんだもの。」と時々庭  
の中の子どもの達をあそびをちらとのぞく。

Aの兄達はあそびをやめて、石段をとおり  
かかる。Tや記録者を見て、

子ども達「こんにちは。」と、大通りの  
角を曲って行く。Tはちよつと隠れ、みな

が通り過ぎたら、出てきて、  
T「なんだ、いっちゃった。」とつまらなくな  
ってしまったのか

T「お母さんどうしたのかな。行つてこよ  
う。」と走って行く。母は、Nの母とNの家の  
縁にこしをかけて話している。縁の前には  
庭につづいた広々とした島がある。

T「おかあさん。おかあさん。この中（島）  
に入っている？」母親うなづく。

Tは広い島の中で黒いつやのある石を投げ  
ては走ってひろいに行く。玉がどこかに行

て静かにゆずるのではない。支えている鉄  
の柱の上ののつてしまふ。T雄がのぼると  
Mちゃんものぼる。

「あんまり元氣すぎちゃうと、幼稚園へ行  
つてから三日から」とおっしゃって幼稚園  
へ行く二、三日前から遊ばないのである。

お正月、誕生日、おひなさま、クリスマ  
スは、お互いに外出着にきかえて、よんだ  
りよべれたりする。これは親たちも一しょ  
である。

Hちゃん（後に述べる）

以上の子どもたちは、先方の母親と何ら  
かの形で接触している。

Aの母 道であつて一般的な話をする。

N子の母 N子の母に手芸を教わり、私が  
最近よんだ本の話をする。またN子やT雄  
の扱い方で話を交換する。だから近所の母

親の中でN子の母が私どもの子どもへの対  
し方を一番よく知っている。N子が問題を  
おこすと私に相談にみえて、二人で一しょ  
に考える。

H子の母 道であつてもお互いに立ちどま  
つていねいに黙礼するだけ。

M子の母 大家さんなので親どうしも親し  
くしている。正月、三月三日、五月五日、  
クリスマスは、家中で集まり、一しょに食  
事をとり、子どもは子ども同志、おとなど  
もおとなの話をする。

この他に、その子どもだけのつながりの  
友達が、（女の子二人、男の子七人）毎日  
ではないが時々「T雄ちゃん」と来る。

T雄の家の南側にある道をはさんで北側  
は門あり、垣根あり庭ありという家がつづ  
く。道をはさんで南側に少しいと、比較  
的小さな家なみで、雰囲気がまるで違う。

小さな家だから云々ということは言えな  
い。T雄の家自体小さな小さな家である。

ただ、子どもへの親の対し方がちがうと  
いうのであろうか。道路でT雄くらの年  
令から、小学校三年生くらいの一団が遊ん  
でいる。

遊びそのものは健康だが、買いぐいをよ  
くする。お昼にパン屋から好きな菓子パン  
を一つか二つかって来て、家にも帰らずに  
たべている。

北側の子どもはそれをしない。

屋台をひいた「おでんや」「お好み焼や」  
はそれを知っているから、T雄の家の先の  
角を曲つて道の北側に入って来た事はな  
い。

北側と南側は一しょに遊ばない。

T雄は誰でも遊べるようにしたいの  
で、誘いに来てくれれば出かけるし、家に  
上つて遊んでもらう。

ってしまった。

T「黒い玉どこかに行っちゃった。」としばらく畠の中を走りまわってさがしていたが、みつからない。

T「おかあさん、おかあさん、ないの。」

母「——」。母はNの母と話しこんでいる。

T「おかあさん。さがしてってばあ。」

と大声でいう。母は話をやめ、Tに

母「玉ねぎとおはの間でしよう?」という。

T「ないよ。お母さんないよ。」

Nの母「おはのところでしょう?」

Tは走って行く。

母「おはふまないで。」

T「ちよっとおかあさん。そっちからみたんじゃわからないよ

——。」と畠の中を走りまわる。何も植えてないところに小さな大根

が一本ころがっている。

T「お母さん、ほら、大根がおっこっていたよ。」

T「ここさがしてもないよ!」

母「もってこちよ。」

T「ないよ!!」とTは相手にしてもらえないからか、おこってしまった。

った。

トランプ遊び——十四時

母「トランプでもしてお食事休みにしましょう。」

T「あの時計のは?」——彼は自発的に提案を試みた。——

母「あれならひとりできるでしょう?。」

### 母の記録③ 買い物について

皆が買い物をするので困った。まず、T雄の家ではどうして買わないのかを、衛生の面や、行儀の面でT雄に納得がいくように話した。そして「皆が何かを買いはじめたら、必らず家に戻っていらっしゃい。」といった。

「三時にならなくてもおやつを必ずあげます。そうしたら、皆が買い始めると走って帰るようになった。「お母さん、皆はドンドン焼を買ってるよ。」という時は、お八つをドンドン焼にかえた。おつかいの帰りにちよっとみてきたりして中に入れるものも、エビ、サラシネギ、おいも等売っているのと同じにした。T雄は結構たのしいらしく、

「新聞紙につつんだのはゴミがついちゃうけどお皿は安心だね。」

おでんがたべたい時は、今日は「おでんにしてね。」というので煮ておく。

しかし、一文菓子屋へ自分で買いくという欲求は満たされない。そこで、有名メーカーのチューインガムと完全包装したビスケットやクラッカーならぞの店で買っていいことにし、ガマ口にお金を入れて首からかけ、バスケットに買うものを持たせた金額を書いて持たせてやった。何度かそうしていたある日、帰って来て、「お母んはいけないうけどばく、どうしてもアンズが買いたいんだよ。」

私がついてお菓子屋に行った。一袋五円という。ポリエチレンの二センチ幅の細長い袋に赤

黒いものが入っていて、二、三人の子どもがなめていた。

「お母さんが買ってあげます」と買ってあげた。帰って、

「どんなところで、どんなふうにして作っているかわからないし、バイ菌でも入っていたらたいへんだから、お母さんの見て



T「並らべてよ。」——並らべ方には自信がない。そこで母に応援を求めた。

(母に並らべてもらって時計遊びを始める。途中母がやり方のまちがいを正し、Tも時々母に質問する。ひとり言も活潑だ。)

T「13は……と、ああそうか、ここでござんした。めくってみますと6でした。それで6をめくりますと12でした。12は手が届かない、手のとどかないところにやるのはやりにくいな。おばさまとって下さいな。」

(「下さいな」と頼まれては、記録者もいやとはいえなくなる。)

——終りに近く——

母「残念ながら13らしいわ。」

T「うわあー残念、おしまい!!」

母「折れ方でお母さんには13だつてわかっちゃうの。」

T「ねっ。」

(僕にもわかるんだという意思表示。首を傾けてニコッと笑う。) さて、記録者Aを加えて、母子と三人ではば抜きをする。Tは、ここにことカードをかける。

母「つねおさん、ごきげんね。」

「ごきげんのTは、母の手札が気にかかり、ついのぞき込みそうにもなる。

母「ずるは絶対にいけないのよ、見ちゃいけないわ。」といわれればのぞくわけにもゆかず、ひとり慎重の構えでゲームに熱中する。Tは真険な面持で母の手札を抜く。調子がよければつい歌も口ずさみたくなるもの。

いるところだべなさい。よその子があげるといっても絶対、ぼく、いらないうのよ。」お母さんの知らない間にたべたりしたらダメ。「お母さんは、そのアンス、おいしくないと思うけどなあ。」

T雄は半分ほどたべていたが

「お母さんのいう通り、変なお味!!」

それ以後、買えるものと、買えないものの自分の基準が出来たらしく、無理に買ってといわなくなった。

遊び友達も時々変る。いつしか北側のN子ちゃんの方になったので、おやつも、N子の家でいただいたり、T雄の家でたべたりして自分で買っていくという事もなくなつた。

たまに南側の子どもが袋にお菓子を入れてたべながら来ても、無関心でいる。

母は、「なるべくお家でたべていらっしやいね。何かたべたくなつたらT雄ちゃんの家であげますよ」という。

「お昼だからお家へ帰つたら」というと、

「さっきT雄ちゃんの家に来た時、パンをたべながらきたでしよう。あれがお昼だよ。」

といわれてびっくりする事もある。

南側の子どもたちと遊んでいるのを見るとN子はT雄に

N子「あなたなゼマッコたちと遊んだの」

T雄「だつてよびに来るんだもの」

N子「あんなにダメッていつたでしよ。」

T雄「どうしていけないの。」

N子「どうしても……しらない。」

などと話している。

T「ツァン・ツァン・チン・ツン・ツン……」

母に次いでTが上り。Tのごきげんも最高。

記A「うまいのね、どこにばばがあるのかわからなかったわ。」

T「今日は見つかるといけないからちがうとこみてた。」

ゲームも一段落、母と記録者はおとなの会話を始める。Tとしては、せっかく勝負がついたのにこれではもの足りない。

T「ね、しようよ。」と呼びかけ、母と記Aの手を取る。しっぺの催促である。

T「僕痛くなかった。」

T君満面笑みをたたえ、極めて満足のようす。

母のしつけ(その一)

トランプ遊びの途中、

T「お母さん お水欲しい。」

母「自分で飲んでいらっしやい。」

T君、台所にお水を飲みに行き、帰ってくる。ところが台所で水の音がする。

母「つねおさん、お水の音がしているわ、ちやんと止めていらっしやい。」

T「だってできないもの。」と一応云ってみる。

#### 母の記録④ けんか

けんかをするのはAちゃんとN子ちゃんが一番多い。

H子ちゃんとは一度もけんかをした事がない。H子ちゃんは、おそらく誰ともけんかをした事がないだろう。

南側の子どもたちとは、リーダーがあつて皆を遊ばせるという形なのでけんかをしてない。(カケッコをさせるとか、陣とりをするとか)

Aちゃんと、

T雄「お母さん、ただいま。」

T雄「どうして帰って来たかわかる。」

母「けんかでしょ?」

T雄「そう」

母「どんなけんか?」

T雄「Aちゃんが桓根のところのぼったからぼくのぼったらダメっていうの」

こういう種類のけんかのくり返し。

N子ちゃんと。

玄関前でN子とゴシャゴシャやっている。N子がT雄をおしている。

T雄「お母さん」玄関に入って来てな

く。

らんなきい。」泣いていてしゃべらない。

(小さい声で)

「N子ちゃんがぶつの」

「どうしてかしら、T雄ちゃん」

(T雄は喋らない。自分が正しければ泣いて答えないはずはないから、T雄が悪いんだなと思う。

「じゃあN子さんにききましょう。」

N子は自分が正しいから、口を大きくあけて喋る。

「T雄ちゃんがね、N子のこと何もしないのに押したの。」

「そう?」

T雄かすかにうなづく。

「T雄ちゃんもそうだっていってるわ、今ちょっとあやまりづらいらしいから、私が代りに謝まるわ、ごめんなさい。」

「ウン」N子ちゃん帰る。

T雄は玄関がしまると母をみて笑った。しばらく入口にこしかけていたが、

「N子ちゃんどこいつてくる」

H子ちゃんも、弟さんもT雄とけんかをするくらいにあちらも積極的に遊んでくれるらいいのと思う。

母「もう一度やってごらんさい。それでできなかったらお母さんやってあげる。」

T君、台所に行く。水道は完全に止められたようす。

お友達とお三時

NとAが揃って来訪。Nは幼稚園女児、Aは4才男児。一同火鉢のまわりに座る。

母「どなたか、お玄関開けっぱなしね。」

N「わたしじゃないわ。」

A「僕もちがう。」

母「つねおさん すみませんけれど閉めて来て下さる？ わるいわね。」

T君、ナイトとしてこの依頼を甘受し、戸を閉めてくる。

母「どうもありがとう。」

母のしつけ (その二)

ペンギン型の小さなバッグの中に一円貨がたくさん入っている。

待ちぼうけをくわされたT君家の中で妹と過す。一円貨を畳に散らし、妹の口の中に二、三枚を突っ込む。

母「いいことかしら。」T君、無関心を装う。

母「お母さんつねおさんのお口の中に入れてあげるわ。」とおせんべを割って入れてやる。妹の口にもおせんべを入れ、一円貨を出す。

待ちぼうけ

T、N、Aは揃ってH家の方に行く。H家の前でNはAと手をつなぎ、Tにはこんなことをいって家の中に入って行く。

N「つねおちゃん、待っててね。」

ひとり残されたT君、記録者につき当ってくる。中をのぞき込むが入ろうとはしない。5分程待つが音沙汰はない。

T「はやく出て来ないかな。」

T君、再び記録者を打ち、門をゆすり、へいぎわのゴミ箱にのり、

遂にはへいにのぼり、すこぶる落ち

着かない。

記B「なお子ちゃん

どうしたのって聞いてみたら？」

T「うん、呼んでみてよ。」

記B「でも、つねお

さんのお友達でしょ。」

T「どろをつけちゃ

うぞ。」——この時記録者は知らなかった

が遊び方が乱暴だとかいうことでHとは遊ばないと言われていたさうである。

記B「大きな声で呼んでみたら？」

### 母の記録⑤ トランプ遊び

お友達にそれぞれ都合があつて遊ばない時は、妹と遊ぶ。三時すぎに妹が昼寝をする。母とトランプやゲームをする。母が仕事をしている時は、一人であそべるトランプを教えるのでそれをやるかマシィン・トイ (Machine Toy) をする。トランプは今年の正月からやり始めた。最初ババヌキを教えた。一番先に札がなくなつたら「もつとやってたかつた。」「一番あとまでやりたいからジョーカーがぼくのところへくればいい。」と何度もいつていた。この頃は友達とやるので、早く札がなくなる方が勝ちという事がわかつてきた。その他、神経衰弱、名あても一人で出来るようになり、シッペも覚えて来た。T雄の家に友達が集まると大抵すべり台を出して遊ぶ。順番に、寝てすべったり、スーパーマンの形をしてすべったり、あらゆるすべり方をやる。やがてお家ゴッコをする。四時近くなつて妹の寝る時間になると、トランプやゲームなど坐つて遊ぶのに変えるよう始めから約束してある。(家全体の震動がものすごいので。)

T「なおおきさん、どうしたの？」と二度繰り返すが反応はない。

T「あのね、遊んでいたいんでしょ。ちょっとみてくるね。」

T君、庭の中に走って行き、N、A、Hがいたと報告し、記録者にも是非見るよう引つ張って行く。が障子が閉っけていて見えない。

T「きつとなおおきちゃん、ぼくと遊びたくないんだ。障子閉めちゃったもの。さっきは開いてたよ。」

Tは先に立って門を出、記録者をH家の内側に残したまま閉めてしまう。

T「このぼってこなくちゃだめ。」

豆腐屋さんが来合せてので戸を開けざるを得ない。T君は走り出して家に駆け込む。

T「お紅茶！」

母「飲むの？ はい、つねおさん。」

T「にがい、飲めないや。」

母「けんかしたの？」

T「遊んでくれないの。佐藤さんに入っちゃって出て来ないんだよ。おばあさんにおこられちゃうんだもの。」とT君は寝そべって足をばたばたする。

三輪車で遊ぶ——十六時三十分

A「つねおちゃんっ。」と呼びに来る。

T「なおおきちゃんもいる？」

A「ううん。」

T「外寒いもの、やめよ。」

母「たっちゃんひとりでしょ、行ってらっしゃいよ。」

T「いやだ。」という

ものの、家の中で遊ぶのもつまらなくなっているの

で、T君外に飛び出してゆく。Aは

三輪車の傍に立っている。T君、その三輪車に腰かけると、Aが後から

押してゆく。焼手屋さんの屋台を後から押しておもしろがったり、三輪車を思い切り走らせたりする。

T「たっちゃん、ぼくの赤い自転車、持って来てよね。」AはTの後について走るのみ。

T「あのさ、赤い自転車 どうした？ あったでしょ、ぼくの。」というわけで、AとTは走ってさがしに行く。

赤と青の三輪車と黒の子ども用二輪車の三台を板戸の前にならべて、

T「白バイに乗って行くか。」

A「僕も白バイに乗るの。」

二人は元氣よく三輪車を走らせ、Aの家との間を往復する。時に

### 母の記録⑥ 手洗い、うがい

遊びから帰って来て、石鹸で手を洗うのとうがいをするのは、母にいわれなくてもやる。

母「お母さんおやつ」

T雄「ハイ」

たべはじめ。三口ほどたべて

T雄「アツたいへん、ウガイをするのを忘れた。」

母「もうたべちゃったからダメよ。いいわこの次からなさい。」

T雄「ダメだよお母さん、インフルエンザになっちゃうよオー」と泣きペソをかく。

母が洗いなさいというから洗うのではなく、インフルエンザに直接、恐怖を感じて

はAが転ろんだり、勢をつけて三輪車を乗り捨て、三輪車だけを走らせたりする。

T「どうとうおしっこしちゃお。」

A「ぼく、しないよ。」

Tはコンクリート塀におしっこをかける。

Aは細い露地に入り込み、Tの家の便所裏をのぞき込んで馳けもどる。

A「くさい、くさい。」

T「くさいか？ ちょっとためしてみよう。」

T君、Aの真似をして走って行く。

T「くさい、くさい。」

二人は小休止をし、道路を大きな子ども達が行きかかるとを眺める。

A「行こう、もう行こう。」

T「うん。」

三輪車を乗りまわしている時、近所の少女

(中一)が竹馬に乗って登場。

T「さちちゃんッ。」

少女「つねおちゃん、これ乗れよ。」

T君、竹馬をつきつけられて考えた。

T「乗れそうもないな。」

少女「乗れっこないじゃない。」

乗れないのが当り前と突き離される。傍にいたA、T君を誘う。

### 母の記録⑦

H子ちゃん(H子ちゃん六才〇か月、弟U夫ちゃん四才五か月)

T雄「お母さん、ぼくとN子ちゃんとHちゃんの家にいったら、おばあさんが出て来て、N子ちゃんが入ってもいいけど、

T雄ちゃんは乱暴だから入ってはダメ」って門をしめちゃったの。」

こんなことが二度つづいたので、私がHちゃんのお母さんをお願いにいった。

「どんな乱暴をしたのでしょうか。」

いつでも、他で遊ぶ時は、家で遊んでいるときにお母さんがしてはいけないといっている事はしちゃう。その他は自分で考えて悪いことではなかったら、遊びたいように遊んでいい。もしT雄のしていることが悪いことだったら、そこのお家のお母さんが、注意してくださるから、ちゃんとおっしゃることをきかなければいけないといつてありますので、注意して頂きますが大抵はやめると思うのでございますが、何としてもお宅のお子様と遊ばせたくないとお思いでしたら、T雄でなく、私におし

ゃって頂くと嬉しいのですが。

「あなたは乱暴だから」というのが何度かくり返されますと、自分は乱暴なんだと思

いこんでしまいます。悪いことをしたとき、一つ一つ直してやるときのT雄自身の

気持の上の障害になつてしましますから、Hちゃんのお母さんからは、T雄がど

んな遊びかたをして、どういふふう

に乱暴だったかは説明していただかなかった。

後日、離れたところのあるお母さんから「Hちゃん

とどこではHちゃんも(T雄より二才上)その弟さん

も(T雄と同年)おとなしくて、よそのお

子さんの遊ぶのをただ立って

みているというふうで、だから、T雄

ちゃんには元気がいいから、こわい」

っていうそうよ。『一しよにあそぶうよ』

ってT雄ちゃんが手をひっぱった

ら、ころんじやったんですって。」

ときいた。

H子ちゃんはそういう事があつてもT雄

と一しよに外で遊ぶ。H子ちゃんのお

さんの姿がみえると、二人ともサツと

かくれるのださうである。(T雄の話)H子

ちゃんの家

にH子ちゃんをよびにい

く時は(弟はめつたに遊びに出ない)門の外でT雄

がまつていて、外の人が中に入り、出

てくれば、一しよに遊ぶが、な

かなか出てこない時は一人

で家に帰ってくる。メソメソしたところは

ない。なかなか出てこないからお

ばあさんがいらつちやつたんで

しょ。だから帰つて来た。

H子ちゃんはT雄の家で遊んでいても、時々、T雄ちゃんの家で遊ぶとお

こられるからどうしようかなあ」とい

A「はい、行こうよ。」

TとAはAの家まで往復する。ここにもう一人かん乗り(空籠に

ひもをつけて乗って遊ぶ)の少女(小四)が登場。

少女「これに乗れる?」

T「ぼくできるよ、そんなの。」

A「さあ、行こうよ。」Aの誘いに応じ、三輪車でかけ去る。

少女「ねえ、やれる?」

T「できるけどさ、今はだめ。」

少女「やってごらんよ、できないの?」

T君、不承々々罐を借りて乗ってみるが歩

けないので靴を脱ぎ今一度試す。

少女「もっと速くやってごらん、できないの?」

T君、思ったようにできないのでいささか

しよげている。

Aと二人で三輪車をぶつけ合いながら走

る。

五時

T、A、玄関のところに来る。TはAにも

一緒に家の中に入るよう誘う。

A「つねおちゃんちに入っいいか、帰って

聞いてくるね。」

T「僕も行く。」

二人でAの家に行き、馳けもどる。

T「靴下が下がっちゃった。」と母に上げてもらおう。

T「この二人、ろうやに入れちゃおう。」と記録者二人のまわりを歩

きまわる。

母「牢屋は悪い人を入れるところでしょう?」

ろうやより素的なところに入れてあげたら?」

T「どんなところ?」

母の記録⑧ 夕方家に帰ってから

六時) 五時になるとT雄は帰って来る。(夏は

家に友達が来ている時はサヨナラをす

る。五時から、TVまんがのはじまる五時

三十分まで、妹と遊びながら、食事の仕度

をしている母に話しかける。

§1、その日にして来たこと

ほんとお母さんに言うとおこられるこ

とただけど、ぼくきょう水たべたんだよ。

道におっこってたんだ。チコちゃんとは

母「わあ、きたない。」

しんけんな顔をして、

「でもぼく水でよくきれいに洗ったよ。」

と力を入れて話す。

§2、いいいいこと人の前では話せない

話 「お母さん。ほんとはいっちゃいけないこ

とだけど、お母さんならいってもいい?」

「ええいいわ」

「あそこのお母さん、いつも髪の毛がくし

やくしやだね。」

「お母さん、ほんとはいっちゃいけないこ

とだけど、ごめんないだけど、ナイショ」

耳元で「お隣のおじちゃま、平凡太郎に

似ているね。」

§3、きいてきた話

「おもちがのどにつかえたらどうしたらいいか知っている?」

「さあ」

「あっちゃんにきいたんだけど、お酢をの

むと、いいんだってさ」

§4、いろんな疑問(遊びながら考えてい

たらしいこと) 「お母さん、こうじゃないかな。」

カチカチ山で『戸だなのすみさい、みっ

さいな』とタヌキがいって昨日きいた

でしょう。あれは『戸棚のすみを見てごら

ん。おばあさんの着物がありませんよ』とい

うことじゃないかな。カチカチ山の話を

昨夜してやったがここところはくわしく

説明すると残酷なので語呂のいいことばで

逃げておいたが、T雄には不可解だったの

だろう。

母「アパートかな。」

T「じゃあアパート中かぎかけちゃお。ガチャリ、ガチャリ。」

T「なお子ちゃんとけんかしたでしょ、だから首をちょん切ってる。」

母「あら、ひどいわね。」

T「ううん、僕がじゃなくて、僕とたっちゃんのかわりに首を、なお子ちゃんとひとみちゃんの首をちょん切って頼んだの。」

母「あああの方ね。(中一の竹馬の少女のこと) あの方は大きい人だから遊んじやいけないっていったでしょ。」

T「でもお友達になったんだもの。」

母「でも五歳と中学生じゃお遊びがちがうでしょ?」

T「そーお?」

母「そーよ。」

母「ろうやは悪い人を入れるのよ、ここには悪い人はいないでしょ、アパートにしたら?」

T「いやいや、ろうやがいい。」

母「どうして?」

Tは答えず、母の側に寝そべり、母のほほを爪ではじく。  
母「ああつたい、よしなきい。」

### 母の記録⑨ 文字について

文字に興味をもつようになった最初は「の」の字である。テレビでマンガのタイトルにたびたび「の」の字が出て来るので何という字とききはじめた。町に出て自動車、の脇に〇〇のパン等と「の」の字が目につきはじめた。

そこで家の目のつく壁に「つねお」と自分の名前を大きく筆でかいて貼っておいした。「これなに」「あなたの名前」といって一か月ほどそのままにしておいた。一か月ほどたつてT雄の留守に「みつお」と書いたのとどりかえておいた。

遊びから帰って「つ」「お」はよめるから一番上の字は何という字だろうと興味をもつて母にきく。

「お父さんのお名前よ。」

T雄は父は「みつお」という名前という事は知っているの。「へえ、みつお、みつお」とよんでいる。

しばらくして前の要領で「とみこ」とかいて隣にはった。「み」知っているので「妹の名前よ」とおしえたら「とみこかあ」とよろこんでいた。最後に「こ」の字がよめるので「こまこ」と母の名前を隣に書いておいた。家中の名前が一つ一つ、頭に入ったわけである。この他小さい時から「よ

いこのくに」が手元にあったので、よ、い、こ、の、く、に、がよめた。

主人から、かねがね、文字は一つ一つ覚えさせずに、一つのみとまり、概念として頭に入るようにしてやらなければいけないといわれているので、知っている字、つ、ね、お、み、と、こ、ま、よ、い、の、く、にの十二文字をくみあわせて「ねこ」とかいろいろことばを並べた。

そのうち「玄関にくつをそろえてぬけるように『くつ』とかいてはつてよ」というので「くつ」と書いてはった。N子ちゃんもおもしろがって自分で「くつ」とかいて縁側の戸袋にはっていた。

しばらく字に興味があるので母が仕事をしても字をかいてという。裁縫をしているときなら、余り布にチャコで、机にむかっているときは、紙にインキで雑巾がけをしているときは、水をつけた指でかいてあげた。

わ、れ、ね、というような、よく似た字は同じ時に使って選別できるようにもした。

半年ほどたつて、「あなた、どれくらいよめるの」といって五十音をやってみたら「ふ」だけあやしかったがあとは全部よめた。

TはAのほほを同じく爪ではじく。  
A「こんなに暗くなってきたんだもの帰りたいな。」

T「いや、帰らせない。」

Aは半分泣き出しそうである。

母「(Tに) あなたがそんなことするから淋しくなって帰らなくなるのよ。」

T「暗くなんかいないよ、家の中は電気はつけてるけど。」

A「電気つけてもだめだよ、もう帰るもの。帰らなくちゃいけないんだもの。」

一旦里心がつくともう止めることはできない。T君もつまらなくなってしまふ。

T「ウィエー、ウィエーと母にすがりついてしまふ。」

母「お母さんに向かってそんな変な声を立ててもだめよ、たっちゃんときくお話し合いなさい。」

A「(掌を見せながら) ほらここ赤いでしょ。ここに包帯したいから帰る。」と立ち上り、

玄関に出て行く。

T「またおいでね。」

A「さようなら。」

母「たっちゃんは偉いわね。泣かなかったわ。何か帰る理由みつけようと思って一生懸命がしたのよ。赤くなってるそこを見つけてそれに包帯しに帰るなんて。」

### 二月二十七日 幼稚園初の保護者会

月요일。父は会社、妹は他へ預けるところもないので母とT雄と妹と三人で出かけた。

十七分間隔で、お客は私も三人だけという、のんびりしたバスにのって多摩川べりを上流に向かってすすむ。

途中、プロ野球の練習場や、温室村、乗馬クラブ等あって、T雄は楽しくて仕方がないといった表情。

終点でバスをおり、幼稚園への道を歩きながら、

T雄「試験の時ほど一しよだった人、来てるかしら。」

母「いらっしてるでしょ。」

T雄「きてないんじゃないかな。だってその子、先生が『眠たい時どうしますか』ってきいたら、『お水のむ』っていっちゃうんだもの。」

母「その話始めてきたわ、ゆかいね、でも、お答えがあってるか、まちがっているかということよりも、どんなふうで元気よくこたえられるか、きくためらしいから、その坊やもきつといらっしてやうっていでしょ。その坊やのお顔覚えてる?」

T雄「忘れちゃった。」

幼稚園の講堂には大分お集りのようである。職員室のカベに組わけがしてあった。

T雄は「はなのくみ」であった。

T雄は運動場で遊ぶ事に約束してあったので講堂に入らずに運動場へ出る。園長先生のお話が始まるころは、もうお友達と遊んでいた。男の子は数人いたが、T雄と同じような体形の肉付きのよい坊やと二人で遊んでいた。

### 園長先生のお話

まず入園に際して準備する品物、服装などについてのお話があり、次に幼稚園に入る気持の上での準備についてのお話があった。個々について具体的なお話があったが、中でも

「お母さん方の中に、幼稚園に入ってから絵が上手にかけたか、歌が上手にうたえるかと心配なさって、絵のとじこみ(ノート)を一生けんめいみておられる方があるが、どんな上手な絵がかけたか、という事よりもみんなと一しよに楽しく絵をかいているかみんなと一しよに楽しく歌がうたえているか、をみていただきたい。」

そういう意味のことをくり返してうかがうと、いよいよ、期待に胸がふくらんだ。「幼稚園の積木はめずらしいので、ポケットに入れて帰ってもお母さんはあわてることなく、またあした幼稚園へ来る時に、ポケットに入れてあげてください。」というお話をうかがった時、あたたかさがじかに伝わってくるような感じだった。

園長先生の次に、スクールバスの説明があつて今日の会は終った。